

戦争による苦難からの道程 みちのり

藤井 幸子

若宮三丁目

戦争ほど人類の残酷な行爲があらうか。

被爆五十周年を迎えるに当たって、今までの人生をふり返る時、私は戦争によるあらゆる悲劇を見、聞き、体験したと思う。

広島で被爆すること

私は広島での被爆の前に、生死を分つ事件にあっている。昭和十八年三月結婚して上海に行き、束の間の幸せを経験したが、九月には上海で夫に現地召集令状が来てしまった。もちろん内地の親兄弟に会う時間など無く、入隊し、一度だけ面会が許されたが、間もなく南方へ発つということであった。

戦況も段々きびしくなっている時に、上海にひとり残された私は、すぐ両親のいる広島に帰る準備をして、十月三〇日に上海を発つた。親切な知人のお世話で、上海丸の一等船室をとって貰ったが、夫の事、日本の今後の事など考えていると、とても寝つかれなかった。

十月末とはいえ船室はむし暑く、疲れていたので何時しかうとうととしていたところ、夜半の二時頃だったであろうか、突然

船体が物凄い衝撃を受け、非常ベルはけたたましく鳴り響き、私はびっくりして目を覚ました。そこは、もう暗黒の世界だった。電気は消え、右往左往する人々の叫び声を聞いて、私も救命袋を身につけて夢中で甲板に上がって行った。

船首はすでに海中に没していた。夜明前の暗闇の甲板は今や生死の審判の場所となったのである。甲板につるしてあったボートが次々に降ろされて行った。婦女子を先に、ということでも第一のボートに移された。しかし船底に栓がしてなかったため、浸水が激しくなり、男の人が必死に漕ぎ、他の人は懸命に水をかき出したが、遂に大きな波が来てボートは東支那海の真中辺りで覆つたのである。私は海中でボートにつかまって震えながら、ひたすら神に祈っていた。

突如光が闇を照らし、駆逐艦からのサーチライトで、くつきり夜空に上海丸の姿が浮かんだ。それはあたかも怪物の如く船尾を上にしたまま最後の汽笛の余韻を残して海底深く沈んで行った。ボートにつかまっていた人々が、次々に照らし出され救

命ボートで駆逐艦に救われたのである。あてがわれた士官室のベッドで、毛布にくるまり温かいおかゆが与えられた時、本当に助けられたことを実感し感謝に溢れた。

疲労の極限でひたすら眠り続けた後、甲板に出てみた。人影は全然なく、何事もなかったかのように船は進んでいて太陽がまぶしかった。私はただ茫然として戦争の残酷さとは裏腹に、広い青い海原が、たそがれの淡い光を受けて美しく暮れて行くのを眺めていた。

上海丸は長崎に着く予定だったのが変更になり、門司に着いた。一晚門司に泊まったが、事後処理に当たった人から、「家に連絡する時は、防諜上、絶対に遭難したと言ってはならない。ただ着がえとお金を持って迎えに来て下さいと言うこと」と言われた。

早速父にも電話したが、「詳しい事は言えないので察して下さい」と言ったことを覚えている。母は予定通り長崎で待っていてくれたのである。

広島に帰りついたのは十一月三日頃だったであろうか。一度夫から「明日南方に発つ。今までのこと感謝」と言う簡単なハガキをもらったのが最後で、明けて昭和十九年一月末には戦死の公報がはいった。

あとで聞いた所によると上海丸沈没は、軍の輸送船との衝突であった由。一緒に上海を発った知人は輸送船に救われて台湾

に着いて無事であるとの手紙が、三ヶ月ぐらい経ってから私の手許に届いた。お互いに救われた船に姿が見えないので、気の毒に亡くなられたと思っていたのである。

夫の戦死のショックで家にばかりいるのは軀に良くないと、親切な方のおすすめで文理大の図書館に勤めたりしたが、昭和十九年の九月からは、広島女学院英文科時代の友人が東京に行く事になったため、後任にぜひ広島女子商に来てほしいと、むりやり頼まれて勤める事になった。

しかし、私もこのままずっと先生を続ける気にはなれなかったし、将来のことを考え両親に相談すると、両親ともに、もう一度勉強して医師になったらどうかと言ってくれたので、私も決心して昭和二〇年三月で広島女子商を辞めた。

校長先生には申しわけなかったが、三月で辞めて、岐阜大学医学部の前身（最初は県立女子医専で始まった）を受験した。四年で卒業の予定が五年になり、さらに一年研修を経て医師国家試験を受けてパスした後、医師免許証を得たのである。

昭和二〇年三月、入試にはパスしたものの妹の病気の看護で入学時期が遅れ、七月末近くに岐阜に着いたが、たまたま着いた日は空襲でほとんど全市が丸焼けになった翌朝であった。行先もなく全く途方にくれたが、入試の時に泊めてもらった小児科開業医の叔父の避難先を探し求めて泊めてもらった。

せっかく岐阜に送った荷物も全焼してしまったし、私はすぐ

広島に帰って身のまわりのものを集めて来なくてはと思ったが、ほとんどの物は、先に上海丸と共に沈没して失くしていることを思い、荷物の事は諦めた（この頃は物がなく何も買えない時代で、食糧の配給はほとんどなかった）。叔父から、大変な時に出来たものだが、せっかく出て来たので入学手続きだけでもして帰るようにとすすめられたので、学校の事務所が開くまでと思い残っていた。そうこうしている内に月に八月六日が出て来た。

広島に特殊爆弾が落ちたとか、始めはさっぱり様子がわからず、次の日は広島市は全部壊滅状態になっているという情報はいり、もういても立ってもおれない気持ちになったが汽車が不通でどうする事も出来ず、動くのを待って広島に向かった。広島には両親と妹がいたので、せめて三人の遺骨でも拾う覚悟で岐阜を発ったのである。

八月九日ようやく広島に着いた。広島は宇品^{うじな}まで見渡す限り壊滅状態で廃墟になっていた。

もちろん住んでいた家（広島市^{のぼり}幟町で爆心地より約一キロメートル）など見当すらつかなかった。戸坂^{へさか}（牛田水源地のずつと奥で爆心地より約五キロメートルくらい）に疎開のため部屋を借りていたのも、もし生きていればそこにいるはずだと思い、生きていることをひたすら念じつつ、炎天下、廃墟の中をとぼとぼと歩いて行った。

戸坂の家が近づく、最初に妹が日傘をさして歩いて来るのが見えた。「ああ生きている」という喜びで胸が熱くなり、次に母、父と三人の生存が確認出来た時はもう感動でものが言えなかった。三人が戸坂にたどり着くまでの状況は次の通りである。

被爆した日のこと

八月六日八時十五分、家にいた母と妹は、ぴかっと光った直後、一瞬にして壊れた家の下敷きになり、頭から押さえつけられて身動きできない状態になり必死に助けを求めた。するとお隣りのご主人が奥さんの名前を呼びながら近づいて来られたので、妹が自分の名前を言ったが、また奥さんの名を連呼しながらご主人の声が遠のいて行つた。もう駄目かと思ひながらも叫び続けていたら、また戻って来て懸命に掘り出して下さって救われた。今度は妹が必死になって、ご主人の助けも借りて母を救出することができた。この時は、もう近くまで火の手が廻って来ていた。

お隣りの奥さんは別の所で御無事だったのでほっとしたが、坊やの行方が不明との事だった。

救い出された母と妹は、はだしのまま、あちこちの切傷や打撲で血だらけの状態で二人手をつないで泉邸^{せんてい}の方に向かった。

突然、火の風が吹きつけて来たので、火が身体についたらたいへんと防火用水に溜^たまっていた水をかぶりながら歩いた。途中、水道の蛇口から水が噴き出していたので、まず口をゆすいで水

を飲み、顔や手の血も洗って泉邸の中に入って行った。そこには、あちこちから逃げて来た人がたくさんいた。泉邸の芝生のある川辺に行った時、轅町のカトリック教会の神父様（ドイッ人）が横たわり、他に二人の神父様がつき添っておられたが、間もなくそこで息を引き取られた御様子だった（この亡くなられた神父様は、私がドイッ語の手ほどきを受けた方だと思ふ）。

無気味な風と共に松の木の方が燃え出した。不安と恐怖で皆黙って空を見つめていると、にわかには空が真暗になって黒い雨が強く降り出した。皆つっじの茂みの中に入ったが、全身びしょ濡れになった。雨が小降りになり皆芝生の所にそろそろ集まって来た時は、もう夕方で、段々薄暗くなっていった。あちらでも、こちらでも人を探す声、遠く近くに悲しい響きが伝わって来た。夜は次第に更けて行く。すると突然父が現れた。父は会社のつぶれた建物から自力で抜け出して鉄道線路を歩いて来たとのこと。そこに集まった人たちの中で、家族が皆助かったのは私たちだけだった。

被爆第一夜はこうして泉邸の芝生の上で過ごした。東の空が白み、夜明けの光りがさして来て初めて、何も食べずに一日を過ごしたことに気付き、元氣な者が近くの人家の防空壕から少しばかりのお米を探し出して来た。これを炊いて皆で頂きましよう、焼け跡からお釜を拾って来てご飯を炊き、おにぎりを作り、皆一個ずつ分けあって食べたが、何のおかずがあるわけ

でもなく、空腹であるはずなのに味もなく、口に入れて飲み込むのがやっと、という食事であった。夜寝るまで何とか元氣だった人が翌朝目を覚ますと冷たくなっているという状態の中で、三日間泉邸に野宿し、四日目によく罹災証明書と草履を一足ずつもらって、はだしを解決することができた。それから三人で戸坂に向かった。

ようやく戸坂にたどり着いたものの、爆心地から五キロは離れていると思われるこの家も、ガラス戸は全部木端微塵に割れていて、それを取り除かないと座ることもできない状態であった。この日に私も戸坂について家族四人と出会えたのである。

被爆後しばらく過ごした戸坂の家の前は川が流れていた。終戦後間がないある夜、空を見上げると星がきれいだった。「国破れて山河あり」と思いながら、これから先、どうなるかしらと母に尋ねたところ「日本が今後一切戦争をしなかったら、生き残って行くでしょう」と、即座にはっきり言った事が忘れられない。

私が勤めていた女子商では、八月六日の朝、建物疎開の整理のため、私が辞めた後も後任がないので校長御自身が私が担任だった一年生の生徒をつれて出かけられ、全員が亡くなられた事を聞き、胸がつぶれる思いだった。この痛烈なやり場のない残酷な思いは決して消える事はない。皆様の御冥福を祈るのみである。

戦後の生活と家族の健康について

被爆後、家族全員の困窮生活は続き、長年の栄養失調で衰弱し被爆した身体に及ぼす影響も強く、特に両親は老化現象が進み、高血圧は特に顕著で、何時も二五〇前後あり、動脈硬化、脳血管障害で、父は昭和三〇年五月二日に急に倒れて、脳出血により二時間余りで亡くなった。享年七十二歳。母は昭和二五年から脳硬塞で、右半身不随になり、その後杖をつけて歩ける程度にはなっていたが、昭和三二年十二月八日心不全、腎不全で死亡した。享年六八歳。

昭和二九年から二年間、知人のすすめで鹿児島県指宿いぶさきに移り住んだ。指宿は気候温暖で温泉もあり、南国情緒豊かで自然も美しく、人情も厚く親切でここでの生活は快適であった。父が気に入ったこの地で亡くなった事はせめてもの慰めである。

妹はやはり病弱で、常にどこか具合が悪い状態だったが、主人が無事に戦地から帰って来たのは幸運だった。若い時には苦労の連続だったが、こどもも三人恵まれ孫も六人生まれた。しかし、甥の一人は、自分が胃腸が弱くどうしても太れないのは被爆二世だからだと思ひ込み、長い間悩んでいた事もあった。

私自身も栄養失調ですぐ疲労する状態だったが、岐阜での学生生活は父の強いですすめで何とか続けたので、どうにか医師になる事が出来た。

私は昭和二二年の春、丁度広島に帰っていた時、急性虫垂炎

になり、広島通信病院に親しい知人のドクターがおられたので、そこで手術を受けた。このころはまだドクターが住まれる家もなく、病院の一室に住んでおられたので、御家族にもたいへんお世話になった。当時まだ両親も割に元気で、すっかり世話をかけた。

偶然この時、同室に入院して来られた方の事は忘れることができない。この方は被爆による顔の火傷がひどく、五回目の手術で入院したとの事であった。顔中つぎはぎだらけで、今回は右眼の上瞼が上方に引きつって、瞼を閉じる事ができないので失明の恐れがあり、皮膚移植の手術をされた。こどもが自分の顔を見ると、オバケが来たと言って恐がって逃げるし、自分でも鏡を見るのが恐いと言って涙された。

私もこれほど凄惨な顔は後にも先にも見た事がなく、可哀そうで気の毒で、慰める言葉もなかった。

今、思うこと

「宇宙から地球を見た時、荘厳なほど美しい」との向井千秋さんの言葉だったが、その美しい地球に住む人間がどうして戦争をやめられないのだろうか。全人類が叡知をふりしぼって、地球を守らなければ地球が危い時だと思われるのに、未だに核兵器廃絶も実現せず、核実験までして新たに被爆者の病人を作っているとは驚くほかない。

地球の破壊、人類の破滅につながる核兵器を作ること、持

つことも悪である、と世界中の人が一日も早く悟るべきである。日本は世界で唯一の被爆国であり、武器に頼らず世界が平和になるために一日も早く核兵器を廃絶して「戦争をしないこと」をモットーとして平和のためのリーダーになるべきだと思う。

振り返ってみるとこれまでの私の人生は、波乱万丈であったが、無我夢中で過ごした時も、色々な方に助けられて今日まで生きて来られた事を心から有り難く思っている。

被爆直後は原始時代の生活だった。その後の世の変化は物凄い勢いで、今日を迎えたが、便利な世の中になってもやはり最終的に求めるものは人間のやさしさ、愛情ではないであろうか。人生の最後は平和な世の中で平安に過ごしたいと切に希うものである。

※泉邸―戦後は縮景園と呼ばれて、広島の新藩主浅野家の別邸で、四万平方メートルの池泉回遊式庭園。爆心地からは一・五キロメートルくらい北東にある。幟町の家からは北に二〇〇メートルくらい。

